『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

いのち輝け

中村了権

今、学長先生からご紹介いただきました中村です。しばし「いのち輝け」というテーマをベースにして、人々の命のありようとか、あるいは人間が人間になる、つまり心豊かな人間になるためにはどのような心意気が必要かというようなことを、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

ところで早速ですが、変なことをお聞きします。皆さんは今、どういうものを食べて成長しておられますか。変った質問ですが、そういう一つの切り口から、自分というものを見つめ直してみるのもおもしろいのではないかと思います。

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

人間一人が誕生するためには、まずお母さんのお腹の中で、お母さんの生き血の中に含まれている、いろいろな栄養素を吸収して育てられます。そして、オギャーと生まれると、お母さんのお乳を頂戴して、しばらく経つと独立して、いろいろと物質的な食べ物を食べて成長していきます。自分を食べて生きている人は、誰もいないわけで、自分以外のいろいろな食べ物を頂戴して、ともに生かされている者同士だという事実を確認し合うことができます。

こういう物質的な食べ物のことを、仏教では、段食といっておりますが、そういう専門的なことは別として、こういう物質的な食べ物だけで私たちが成長し、育てられていくかといいますと、そうではありません。

人間にはいうまでもなく感情の世界があります。ですから、その感情の世界から満たされる食べ物をお互いに食べ合わなければ、成長も生かされることもないと思います。それはつまり、人の喜びを自分の喜びとし、あるいは、人の悲しみ、苦しみを自分の悲しみ、苦しみとするというような、そういう意味の食べ物があると思います。それを触食（そくじき）といいます。現に、そのような温もりのある心情を食べ合って、ここに成長せしめられているもの同士だといっていいと思います。

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

さらに、人間には意志的な思考活動があります。これは善、これは悪、これは正、これは邪だというような形で、物ごとを正しく判断する。そういう正しい判断をお互いに食べ合うことで、人間は大きく成長せしめられていくのではないかと思います。そういう食べ物のことを思食（しじき）といっております。

さらに煮つめていきますと、人間には今よりもたくましく、よりよく生きていきたいという意味において、自己試練をする世界があると思います。現状の自分の生きざまを丁寧に顧み、反省しながら、今よりもよくなるために修業をする。そういう自己試練を喜び合うというお互いのあり方が必要かと思います。そういう食べ物を禅悦食（ぜんえつじき）といっております。最後にやはり、真理の世界というものがあります。それぞれの真理を見極め合って、お互いに真理を食べ合うということがあって、人間は大きく育てられ、生かされていくのではないかと思います。そのような食べ物を専門的には法喜食（ほうきじき）といっております。人々は大体この六つの食べ物を頂戴して、心豊かな人として育てられていくのではないかと思います。

では人々は、この六つの食べ物をどのように食べて人間的に成長していくのか、ここに二、三の事例を挙げながら、その心意気についての学習をしてみようと思います。

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

今、私自身、非常に感動し、共感を持てる詩があります。それは、石垣りんという四十歳の主婦の方の詩です。

食わずには生きていけない
飯を　野菜を　肉を
空気を　光を　水を
親を　兄弟を　師を
金も心も
食わずには生きてこれなかった
ふくれた腹をかかえ　口をぬぐえば
台所に散らばっている人参のしっぽ　鳥の骨　ししの腹わた
四十の日暮れ
私の目に初めてあふれるけだものの涙

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

こういう心情を詩に託して自らの食べているものへの一つのあり方を示しておられる、非常に感動的な詩です。

この石垣りんさんの詩のように、人間は誰でも、食わずには生きていけない。野菜も肉も、魚も、沢山のものを頂戴して生きています。ところが、実は、私が毎日頂いている食べ物は、全部命があるという事実があります。それを案外、忘却しがちなのです。一匹の魚でも肉でも、一本の大根であっても、皆命を持っているものです。そういう命を持ったあらゆるものを頂戴して、この自分の命が今、現に、一瞬一瞬、脈々と生かしめられているということへの深い深い喜び、感動が、この詩の中に込められています。

そういうことを、自分の生身に実感しながら生きている人は沢山おられます。一人例を挙げてみますと、島根県のあるお百姓のおばあさんです。お百姓さんですから、野菜を作るために始終、自分の畑の草を抜くという作業をしている。そのおばあさんの畑での草の取り方が実におもしろい。畑の雑草を一本一本抜くたびに、そのおばあさんは「すまんのう、すまんのう」と言いながら抜いている。皆さん、雑草を抜く時にそんな仕草をされますか。

そのおばあさんに、なぜそういう仕草が自然に出てくるかといいますと、やはり、雑草の命

への思いやりがそこにあるわけなのです。自分が作る野菜のために、畑の雑草をぽいぽいと抜く。そこでは、雑草の命を犠牲にしている。そういうところに人間の傲慢さ、あさましさがあるなあと感じられて、「すまんなあ」という懺悔の心が脈打っている。それと同時に、命のある野菜を頂戴して、今、現に、一瞬一瞬生かされていることへの感動も、そこには含まれているのです。そういうものがこのおばあさんの中にある。

このおばあさんは、いつも口ぐせのように「お蔭様で、いろんなものを食べさせていただいて、生かしてもらっている」、そして「朝、目が覚めたら、この両方の目もまだまだ見えてくださる。手を挙げたら、ちゃんと手も挙がってくださる。足を動かしたら、ちゃんと足も動いてくださる。これ、あたりまえのことだと思うが、これは大きな大きなお恵みの中に含まれて生かされている証拠だ」と言っておられる。ですから、そのあり方に有難うと合掌せざるを得ないような生き方をしておられる。そういうおばあさんがおられるのです。

そのおばあさんの毎日の仕事がおもしろい。お孫さんが、おばあさんの日頃の仕事をよく観察していたのでしょう。ある日のことです。お母さんのところへ跳んできて「おばあさんは嫌らしい。おかしいよ」と言う。それで、お母さんが「何が嫌らしいの。おかしいの」とたずね

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

ますと、その子は「おばあちゃんは、便所に入って、いつもうんことおしっこを拝んでいるよ」と。子どもの目は鋭いです。おばあさんのそういう変わった仕草をキャッチして、驚嘆しているのです。そしてお母さんにたずねたのです。ところが、おばあさんにとってこの仕草は当然のことなのです。なぜかといいますと、いろいろな食べ物を沢山頂戴して、口から食べ物をお迎えして、その食べ物は自分のお腹の中で私自身を生かす大きな働きをして、そして帰っていかれる、と。だから有難うとお見送りするのは当然だ、と。こういう心意気というか、命へ目を向けたすばらしい輝かしい感性があるのです。そういうように、非常に丁寧に、自分の命を頂戴する生き方をしておられるのです。

そういうことで、この私が頂いている数限りないものには、すべて命があるわけです。それらの命を頂戴して生かされている。これは事実です。

生かされているということは、魚の命とか野菜の命をお預かりして生きている、という受け取り方ができるのではないかと思います。つまり、いろいろな命をお預かりして生かされている身であるから、その分まで一生懸命生き切らなければならないという一つの人生観が、ここに確立されているのではないかと思うのです。

先に紹介しました石垣さんの詩のように、人々はまた、親を食っている。皆さんは自立しておられるかどうか知りませんが、大体は親のすねをかじっているというのが現実の生活ではないでしょうか。親の子どもに対する苦労を頂戴して、今、生かされているという事実があります。さらに、師、いわゆる先生に苦労をかけながら、先生を食って生きているという見方をしてもいいと思います。

自分には、知識とか、技術とか、教養を生み出す力が何もないのだけれども、先生からそのような知識、技術、教養を頂戴して、いろいろな活動ができるところまで育てられてきているという見方がされていいわけです。そういうことを思えば、本当に親の恩とか師の恩を忘れて、毎日を生きることができないという実感が湧いてきます。親を食っているという視点から実感して、私はよく子どもたちに言うのですが、「君たちは吸血児や」と。そうしますと、「先生、それはうそだ。ぼくらはそんなドラキュラではないぞ」と返事が返ってきます。ですから「うそ言え。お前はお母さんのお腹の中にちゃんと十月十日いて、お母さんの胎盤を通してお母さんの血液を吸ってきたではないか。これは絶対的な事実であるぞ。木の股から生まれてきたものは一人もおらん。だから吸血児ではないか。生まれてからも君たちは立派な吸血児

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

や。お母さんのおっぱいを飲んだだろう。あのおっぱいはお母さんの血液がこの乳房の中でお乳になったものだ。そういう吸血児が人間になるということはどういうことか。こうして現に生きている事実の背後には、そのお母さんの血を吸わせていただいたという恩恵がある。そういうことに気付いて、その恩恵にまだなんのお礼も言っていないし、なんのお返しもしていない自分であったと目覚めたら、そこで吸血児が人間になるんや。それに気付かなかったら、君たちは吸血児のまま、一生を終わってしまうのではなかろうか」というような会話を交わす。そうすると「うん」とうなずいております。

そのお母さんの血液はどうして出来たのかと、その根源を探っていきますと、これは、私を取り巻いていてくれる宇宙の命へと広がっていくのです。ですから、自分以外の大いなる宇宙の命によって一瞬、一瞬生かしめられているという、こういう見定め方の中に、今の自分をいかに位置づけるかということだろうと思います。そのような心意気を味わっていきますと、皆さんも学習されたと思いますが、「如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし」という実感が十分味わえるのではないかと思うのです。

さらに、この石垣さんの詩の中にあるように、我々は光や空気や水をも食って生きている。

しかし、この光とか空気とか水を、少しも有難いと思っていない。それに、人間が生存せしめられていくためのものとして、それ以外に大地があります。これも非常に大切なものです。もし大地がなければ、人間は一瞬たりとも生きてはいけない。では、土に感謝しているかというと、全然感謝していません。自分を生かしめている力に対して感謝をしていないという事実があります。

土のことで思い出しましたが、かつてローマ法王が日本にお出でになり、飛行機から空港に降りられた。その時に、大地に接吻されましたが、あれは何か感動的なシーンでした。やはりその土地に接吻して、大地への感謝の心を捧げられたのです。

人間と宇宙の命は、全部つながっている。もし真っ暗闇の土の中に微生物が生息していてくれなければ、人間は生きておれません。学問的に大地は、条件がよければ一グラムの土の中に五千万から一億のバクテリアが生息しているといわれています。

また植物は、光のエネルギーを利用して、無機物である水と炭酸ガスから複雑な有機物を合成しています。その原料になる炭酸ガスを補給している主役が、真っ暗闇の土の中に生息している微生物です。人間が息をして出す炭酸ガスなど、しれています。そんなものだけで植物は

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

育ちません。もし、真っ暗闇の大地の中の微生物が、莫大な炭酸ガスを出してくれなければ、植物も育たず、植物が酸素を出してくれなければ人間の姿も今、一瞬にして消えてしまうのです。つまり、土壌の微生物が呼吸して出す炭酸ガスによっていろんな植物が育ち、その植物が発する酸素を吸って、人間を含めた地球上の全生物が、滅亡せずに今、生き続けていられるということでしょう。

こういう大自然の命を生かしめる仕組みがあるわけで、人間というのは、あまり思いあがってはならないのです。大自然のそういう大いなる働きによって、現に自分がいるという見定め方を、いかにし合うかということが、人間にとって、まず第一に大事なことだと思うのです。

あるお医者さんがこんなことを言っておられました。「科学技術はどんどん進歩するが、人間の力はほんの微々たるものだな」と。思えば人間は、雨にぬれてもびくともしない皮膚、日に当たってもびくともしないような皮膚ひとつ、完全につくることができないのです。私は約五十年間、人生を送らせていただいておりますが、この眼を五十年間使わせていただいて、まだよく見えます。人間の内臓なども拝見すると、これはもう人間の力では到底及ばないと、思わず合掌せざるを得ないという一つの感動的なお話を聞いたことがあります。そう見ていきま

すと、人間の生命現象は長い長い無限の経過を経て、いわゆる他の大いなる力によってつくられてきた完成品なのです。我々一人ひとりが、そういうところから自分のあり方を見つめていかなければならないのでしょう。

以前、京都大学の総長をしておられた平沢興先生は、よく人間の命について教えてくださいましたが、そのようにして発生してきた人間というものが、現在の学問ではまだ十分にわかっていないそうです。人間の命の起源は五億年ないし七億年の昔である。その五億年ないし七億年の生命の流れの末に、この生命の流れの一滴を頂戴して、私たちは一人の人間としてこの世に生まれてきた。そして、この一人の人間は小さな生きた細胞の集まりであって、その数は三十数万億にものぼる。そういう生きた細胞の共同体である人間を考えていると、すばらしいなと思います。何気なく営まれている一つの呼吸、あるいは心臓の働きひとつにも、数億年の命の流れがあり、かつまた、この三十数万億の細胞の共同体の調和ある営みの結果であるということでしょう。三十数万億の細胞といえば、世界の人口の一万倍です。もし、そういう命の一滴を頂戴していなかったならば、今、皆さんとお出会いすることができないわけで、こうしてお出会いできるのも、この数億年の命の流れ、三十数万億の細胞の調和がたまたま保たれてい

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

るからなのです。

こう見ていきますと、人間に生まれさせてもらって、ああだこうだとぶつぶつ愚痴や不服ばかりいっていることはできない。人間に生まれさせてもらっただけでも、朝から晩まで喜ばなければと思います。大体、人間は愚痴や不服ばかり言っていますと、身も心も疲れてぼろぼろになるものです。

みんな友だちであるわけですから、そういう感性を輝かせて人と親しみ、共通の命を大切に生き切っていくという立ちあがり方が必要だということは、こういうところから学ばせていただくことができます。

刑務所に入っている方がございました。こういうところに入っている人は、一般的にいいますと、社会的倫理に反した人です。彼は監獄に入れられている身ではありますが、よき師に出会っていろいろお話を聞いているうちに、例えば、自分の身体にある細胞は人間社会の法律とか人間の感情とは別に、彼の命を守るために日夜、働いていてくれて、呼吸もでき、心臓も動いていてくれる、すばらしい命を自分は頂戴していたんだなと気付いて、そのことに驚嘆しながら立派に立ちなおっていった。そういう人がございます。

このように、自分の命が生かされていることに目覚めながら、人間は本当の人間に生まれていくのではないかと思うわけです。

では人間が人間になるというのはどういうことなのかということを、ちょっと考えてみたいのです。人間というのは、一回誕生しただけではなかなか心豊かな人間になれないということがあるのではないでしょうか。人間以外のものは、無自覚の自覚で、みんなそれぞれの任務を果たして、心豊かに生きております。犬は一回誕生しただけで、犬を生き抜いております。何の文句も言わずに、みんな自分の身に引き受けて、犬の役割を果たして生きております。だから、かわいいのです。

花は花で、切られて花びんに生けられても「お前、ひどい奴だ」というような文句も言わずに、生き切って花の任務を果たしている。だから花は美しいのです。人間以外はみんな置かれた場所で、枯れるまで、死ぬまでしっかりと自分の任務を果たして、心豊かに生きようとしている、そういう美しさがあります。

ところが人間はひとつ間違いますと、いろいろなものに反逆する現象を生みだして、生んでいただいた親にも反逆して生きていくということがあります。それは非常に醜い姿だろうと思

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

います。反逆していることに気付くということが、人の人生においては大事なのです。あらゆるものに反逆して、醜い生き方をしていることに気付くには、やはり真理の世界に触れなくてはならない。その真理の世界においては、すでに大いなるお恵み、慈悲の中で、自分は許されて生きている、そういう一つの世界に気付かせてもらうことによって、いかに自分は現実にいろんなことに反逆して生きている愚かな者であるかということが感じ取れます。

そういうことで、こういう体験が一つあります。あるお母さんに相談をかけられたことです。それは何かといいますと、中学二年生の娘さんがおられて、学校の成績はトップクラスでバレー部の選手で、非常に活躍している。ですから、親にとっては自慢の娘なのです。ところが、お母さんがその娘さんに、忙しい時に「ちょっとお手伝いしてちょうだい」と頼むと、大体は「いや。勉強があるもん。宿題がある。友だちと遊ばなきゃならんもん」と答える。そういう日常であった。それでお母さんが相談にみえた。そして「先生、自分のことだけ考えて生きているのは豚と変わりませんね。この豚むすめを人間に育てるのは非常にむずかしいでしょうね」とおっしゃる。そこでお母さんに「それはとてもむずかしいことだけれども、ひとまずお母さん、あなたもその豚むすめのまねをしなさい」と申しあげた。つまり、お母さんも、日

常の炊事や洗濯や、ふろわかしをやめて、自分のことだけをして、それ以外は、みんなやめてしまいなさい」と申しあげた。そうするとお母さんは「冗談じゃない。主人もおりますし、そんなことしたら、家の中むちゃくちゃになってしまいます。」「でもね、自分のことしか考えない豚むすめが、人間になれるかなれないかの瀬戸際ですぞ。まあ、朝ごはんだけ食べさせて学校へ行かせなさい。そして、夕食も洗濯も、ふろわかしも一切やめなさい」と。するとお母さんは「一度主人と相談して頑張ってみます」と言い残して帰られた。

それから一週間ほどして、娘さんを連れてお越しになった。その娘、いつものように放課後バレーの練習をして、お腹を空かせて帰ってきて、帰ってくるなり「お母さん、お腹空いちゃった、夕食！」「お母さんは今日は夕食作りたくないの。」「お母さん、気分がわるいの」と娘が聞く。「いいえ、気分は全く壮快です。」そうすると娘さんは、変な顔をしている。やむを得ず自分で冷蔵庫から材料を出して焼そばを作って食べていたそうです。しばらくすると「今日、バレーの練習をしてきたので、汗かいて、身体、気持ち悪いの。先におふろいただこうかしら。」「どうぞごゆっくり。」しばらくして娘さんが「お湯入ってないじゃないの」と怒り狂ったような言葉を発した。「そうでしょう。お母さん、今日おふろわかしたくないの。」そ

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

うしたら娘さんはぶつぶつ言いながら、自分でお湯を入れて、おふろへ入っていたようです。いつもなら、お母さんはおふろの脱衣所に置いてある整理たんすの中に、洗濯したそれぞれの下着をきちっと仕分けして入れておられた。娘さんの分も入れておられた。でも娘はおふろに入って、上がってきて引き出しを開けて見ると、自分の下着は一枚もない。「お母さん、下着、一枚もないじゃないの。」「お母さん今日、洗濯したくなかったの。」娘さんは、目を白黒させてびっくりした。仕方がなく、明日のために自分で洗濯機を回して洗濯していたそうです。お母さんは、ここは辛抱どころと思って、毎日毎日それを続けた。とうとうその娘が「お母さん、頭がおかしくなったんじゃないの」と言った。「お母さんはクルクルパーではございません。ただ、あなたを手本にして自分の幸せの追求を始めただけです。」こうおっしゃった。娘さんは「私を手本に？」「そう。お母さん、忙しい時に手伝ってくれと頼んだのに、あなたは勉強がある、宿題がある、友だちと遊ばなきゃならんから嫌だと言ったでしょう。お母さん、あれからいろいろと考えてみたの。自分のことだけ考えて生きていく生き方って気楽でいいな。お母さんね、この齢になって初めて、あなたのお蔭でそのことに気付いたの。」皮肉ですね。「だから、やりたくないことはやらないことにしたの。そうしたら、沢山ゆとりができて、

かねて読みたい読みたいと思っていた本も沢山読めて、今日までにもう五冊も読んだわ。これからもあなたを手本にして、母さんいきいき人生を送るの。」そうしたら娘さんは黙って下を向いて聞いていたそうです。

更にお母さんは、その娘に「お母さんだって、今日は気分が悪いな、頭が重いという日もある。でも、これしきのことで寝込んでいたら、あなたやお父さんにすまないと思って、気合いをかけ、親子三人の小さな家庭だけれども、誰かのお役に立つ一日でありたいという願いを持って生きるのが人間ではないかと思って、今まで頑張ってきたの」と、娘さんに話した。その翌日から、娘さんは「何かお手伝いすることある」と声をかけるようになったそうです。

ここで自分のことだけしか考えない豚むすめが、少し人間的に成長し始めたのです。いわゆる人間としての本来のあり方に目覚め始めたのです。

人間の生命は、この地球上で唯一の自覚生命なのです。だから自覚力を持った命です。その自覚を深めていくことが、人間の成長のキーポイントになるわけです。成長して欠点のない人間になるということではない。欠点のない人間をめざすから、人間というのはノイローゼになったり、自殺をはかったりするのではないでしょうか。この恥ずかしい、自分のことだけしか

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

考えない生き方をしている自分が見えてくるということが、人間として成長していることだろうと思うのです。恥ずかしい自分、恥ずかしい自我に気付くことが、人間としてすばらしいことであって、その気付きによって人間が成長せしめられていくのだというふうに味わわせていただくことができるのです。

では、どういう場で恥ずかしい自我に目覚めていけばいいのかといいますと、それはいうまでもなく、この日常茶飯事の中で築き、育てあげられていくものだと思います。例えば、こんなふうにして目覚めていった子どもさんがおられます。この子のお母さんは九州出身です。毎年、お盆になると、九州のふるさとへ帰られる。おじいちゃん、おばあちゃんにおみやげを持っていって、久しぶりの出会いを楽しむという一つのしきたりを持っている。今年も九州のおじいちゃん、おばあちゃんから「会える日を楽しみに指折り数えて待っているよ」と手紙が届いた。それで、あと一週間、あと二日と楽しみにしていた。ところが、なんと、平素病気をしないお母さんが、こともあろうに、出発前夜に熱を出して寝込んでしまわれた。お医者さんに見てもらうと、旅は無理だ、そんなことをしたら命に関わると言われて、とうとう九州行きはやめになった。その子は病床に伏しておられるお母さんの枕許で、中止になった不満をぶちま

けた。「よりによって出発前夜に熱なんか出して、お蔭でおじいちゃん、おばあちゃんに会えないじゃないの。会えないと小遣い貰えないじゃないの」と、お母さんを責めたのです。その時、お母さんは黙って「ごめんね」と言っておられた。この子はまだ、人生というのは思いがけないことが起こるものだということがわからなかったのです。しかし、その子は女の子で、それも長女でしたから、翌日からお母さんの代理で炊事、洗濯、掃除、ふろわかしを引き受けて、「嫌だ、嫌だ」とぶつぶつ言いながら家族の面倒をみていた。人間は、誰かのために代わってやっているという受け止め方をすると、自分がやっていることが非常に苦しくなって、ぶつぶつ、ぶつぶつ、嫌だ、嫌だと愚痴を言わなければならないのです。

先程も言いましたように、人間以外のすべての生命は、与えられた時、与えられた場所で全力を尽くして生きていくという美しさを持っている。ただ人間だけが、何か自分の身勝手な立場から自分のやっていることに対して、ぶつぶつ、ぶつぶつ言うくせがあります。

ところがこの子は、その翌日の夕方、洗濯物を取り入れて、お母さんの部屋へ持っていった。お母さんの下着も洗濯したのです。すると、お母さんが「きょうちゃん、苦労かけてごめんね。有難う」とおっしゃった。その子曰く、自分はそのお母さんの一言で、自分の態度に愕

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

然とした、自分の今までの生き方、態度に対して愕然とした、と。なぜなら、その子は十四歳なのですが、私は十四年間、お母さんに洗濯してもらってきたのに、一度もお礼を言ったことがない。言わないどころか「何よこの洗濯の仕方。もっときれいに洗ってよ」というような文句ばかり言ってきた。そんな自分に対して、しかも、ぶつぶつ嫌々やったのに、お母さんは本当に申しわけないという顔で、お礼を言ってくれた。お母さんが中学しか出ていないのを、自分は今まで内心、非常に軽蔑してきた。このごろの子は学歴、金のかせぎ高で、あるいは地位や名誉でしか人を見んようになってしまっている。どんな教育を受けているのか、疑問に思いますけれども、この子はその時以来お母さんを、自分には足許にも寄れないくらいすばらしいお母さんだと、心から尊敬するようになったそうです。その子はまた言うのです。今まで、先生とか友だちとか、親とか、兄弟からあれこれ注意されると、ぷっとふくれ面になっていた自分が、このごろは、それは自分のことを気づかっていろいろと言ってくださるのだというふうに、人さまの言葉を受け止めるようになったというのです。そこで、この子は生活を通して気付きました。自我というのは、自分の都合のよいように見たり聞いたり、考えたり行動したりするものだ、と。この気付きは大きいです。

『広辞苑』をひきましても、自我の実態は解説していません。それがこの子は、仏教の言葉でいう機の深信とか法の深信という言葉は全然知らないのに、すでに自分の生活体験を通してそういうことをちゃんと観知した。すばらしいことだと思います。このように自我が見えてきますと、自分はいかに真実からはずれているかということがわかってくるのです。いわゆる、我欲とか我執の塊であることが知らされてきますと、そういう自分にさえ、すでに大いなる愛がある、その大いなる愛によって生かしめられ、かつ、成長せしめられている、有難いな、という感謝の生きざまが、そこに出てくるのではないでしょうか。

先般、豊田市にある聖香園愛の家というところを訪れました。ここは、山本修司という方が住んでおられるところですが、自分の自宅を開放して共同生活をしながら、ともに助け合い、真理を求めるという願いでつくられた家です。ここには現在十三人の方が住んでおられます。身体の不自由な方、人生に悩んでいる方、世間では非行といわれる子どもたち、生まれたばかりの赤ちゃんから九十歳までの年齢構成になります。山本さんも、その一人なのです。ここは単なる施設ではない。山本さんが十七年前にそこに住んでいたのが、山本さんの人柄、人格にひかれて自発的に人々が集まってきた、非常にユニークなところです。縁ある人が集まって、

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

家族として自由に暮らしている。ですから、それぞれの人が分相応にいろいろな仕事をしながら、一つの家庭をつくりあげていて、そこには、ともに生きる香りがただよっているようでした。

聖香園愛の家は、「十方来人座して対面す」という鉄則をもって実践している。ちょっとむずかしい言葉ですが、どういうことかといいますと、どなたがお出でになっても、最高の礼をもって座敷にお通ししてお茶を差し上げるという、そういうお出会いをすることを、鉄則としている。人との出会いという問題については、非常に徹底して丁寧にやっておられる。ともかく人を信頼していらっしゃるのです。

例えば、行商のおばさんが来る。そうすると「ご苦労さま。まあ、お上がりください」と、おっしゃる。行商のおばさんは「玄関で結構です」と言われるけれども、「上がってください」と言って、行商のおばさんにも礼を尽くされる。どなたがお越しになっても、ここは皆の家だから、玄関口に出た者が、お出でになった方に最高の礼を尽くすということなのです。山本さんは、この聖光園というのは欠点だらけの人間が住んでいて、いたらぬものばかりだけれども、精いっぱいのお出会いをさせてもらうことを大事にしている、とおっしゃる。人々との

出会いを大事にしていると、いろいろなことが人さまから教えられて、自分がお育てにあずかっていくという、そういうすばらしいことがある。様々な人間とふれ合って様々な人間をよく見つめることによって、いたらない自分が、心豊かな人間に育てられていくという、一つのリズムが人間の世界にはあると思います。

実は、私はこの聖香園に、前もって約束をして行ったのですが、ちょうど、約束していた時間に山本さんに急用ができて、その用事をすませに行かなければならなくなった。それで、そこに住んでいる重度障害者のゆうちゃんに、今日、何時に中村さんが訪れてくるから、出迎えてねと頼んで、用事をすませに行かれた。私は、そのことを知らずに聖香園に行った。玄関で「ごめんください」と、案内を乞うと、シーンとした聖香園の奥のほうから「はい」という元気な返事がしたかと思ったら、バーンとドアが開いて、重度の身障者、ゆうちゃんがトカゲのような格好をして、廊下をバタバタと泳ぐように現れた。そして「お待ちしておりました。聖香園は来た人の家でありますから、自分の家のように気楽にお上がりください」と言われた。私は急にそう言われても、今まで他人の家を自分の家とする実感を持ったことがないのです。大体において、自分の家とか、あの人の家とか区分けします。ところがここには、それがな

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

い。みんなの家ですから気楽にお上がりくださいと言われて、ここはそういうところかなと思って、お座敷に上げてもらった。そうすると、ゆうちゃんが「ちょっとご無礼を」と言って出て行った。しばらく座敷の床の間に掛かっている掛軸を眺めながら待たせていただいていると、「お待たせいたしました」と言って、右脇にお湯の入ったポットを抱え、左手で身体を支えて、汗をタラタラ流しながら、汗だくで、不自由な身体でお茶の接待をしようとなさるのです。それで私は、「どうぞおかまいなく」と重ねて言いましたら、「いや、聖香園は至らぬことばかりですけれども、精いっぱいかまうところです」とおっしゃる。それでじっと見ておりましたら、不自由な身体で、お茶の葉を急須に入れようとされる。そうしますと、パラパラとお茶の葉がこぼれる。その時に「私がしましょうか」と言おうと思いましたけれども、思っただけで、私の身体は動きませんでした。急須にポットからお湯を入れようとされるが、身体が震えてうまくお湯が入らない。ですから、じゅうたんの上にお湯がポロポロと散らばる。相当の重度身障者のゆうちゃんは、緊張もしておられたのでしょう、「すいません、すいません」と繰り返し、じゅうたんの上にこぼれたお湯をぞうきんでふきながら、私の目の前で、大変な苦労をしながらお茶を入れようとされる。やっとお茶が入った。二十分くらいかかって一杯の

お茶が入った。そして「どうぞ」と言われる。私は無意識のうちに両手を合わせて、「頂きます」と一杯のお茶に感謝せざるを得ませんでした。

今まで私は、一杯のお茶を頂く時に合掌して頂いたことは一度もなかった。そのような生活をしている私の家庭あるいは学校に、立派な心豊かな子どもが育つはずがない。今まで恥ずかしかったなと、ゆうちゃんの生きざまを観察させていただいて思いました。そして、身障者の方って偉いんだなと思いました。無言のうちに一人の人間に一杯のお茶の前で手を合わさせる。これを教えるだけのすばらしい力を持っておられるのです。私にとってはこのゆうちゃんは、すばらしい教育者であったと感じさせていただかざるを得なかったのです。

山本さんはおっしゃる。聖香園へはよく、いろんな人がお越しになる。こられたお客さんはそこにおられる身障者の方に「あなたは大変なお身体だけれども、ここでどんなお仕事をなさっていらっしゃいますか」とたずねられるそうです。そうしますと身体の不自由な身障者の彼らは、胸を張って「ぼくらは、そこにおられる山本先生を教育しているんや」と、自信を持って答えるそうです。そこで、たずねたお客さんは「何を教えておられますか」とたずねます。「あたりまえがあたりまえでない世界を、私は山本先生に教えているんや」と胸を張る。どう

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

いうことなのかというと、山本先生は目が見えるとか、耳が聞こえるとか、歩けるとか、有難いことやということを頭でしか認識していない。ああ、目が見えるなとか、聞こえるなとか、歩けるな、有難いこっちゃなという認識は、頭では持っているらしい、と。ところが「山本先生は、その実感がないんや」と。だからその実感を山本先生に教えるためにここにおるんやと、自信を持って一緒に生き切っておられるわけです。

山本さんはその身障者の方と一緒にふろに入られるそうです。すると彼らは洋服を脱ぐのに三十分も四十分もかかって自分で脱ぐ。それを山本さんは見ていて、自分がすっと服を脱げるのは何と有難いことかと、そういう実感教育がなされて、うれしい。身障者のゆうちゃんたちにすばらしい生き方を教えられる。相手様から自分はすばらしい生き方を教えられているという世界が、ここに見つめられているのです。

そういう意味で山本さんは、ゆうちゃんたち障害児の方を、障害児とはおっしゃらない。障害者菩薩だとあがめておられます。この聖香園では、何ごとも家族ですから、ああだ、こうだと教えるということは、何もしない。ただ、皆で一つだけやることがある。先程言いました客に礼を尽くすことと、もう一つみんなでやることがある。それは食事をする時に感謝して食べ

るという習慣です。これを鉄則にしておられる。

先程も学習しましたように、自分が食べるものの背後には、まさに、無限のお働きの世界がある。だから、合掌して頂こうじゃないかということで、食前には必ずみんな一緒に合掌しながら、「天地一切の恵みと、これをつくってくださった皆さまに感謝いたします。頂きます。」これを唱和する。ある日のことです。山本さんの前で食事をとろうとしていた身障者の一人の子が、一生懸命食前のことばを唱和しようとしている。この子は言語がちょっと出にくいようでした。その時にその子の唾液が山本さんのみそ汁へピシャッとかかった。ご飯にも、かかった。その時、山本さんも真心込めてその言葉を唱和しておれば、他人の唾液が自分のみそ汁やご飯にピシャッとかかったのがわからないはずです。しかし、やはり山本さんも先生根性があって、まじめにみんな言うとるかな、唱和してるかな、と見ていた。だから、唾液が入ったのがわかったのです。ところが唾液が入ったことを知った以上、山本さんもたまらないものだから、横で一緒に食事をとろうとしておられた奥さんに、小さい声で「ちょっと、このみそ汁代えてくれ」と言われた。奥さんはその事情を知らないから、大きな声で「まだ、みそ汁、冷めておりません」と言った。それでも奥さんですから、主人の言うことだからと代えてくれてほ

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

っとして、そしてもう一度、自分だけ「頂きます」をして食べようとして、ふと自分の前の一人の身障児を見た。みんなは食事を始めているのに、その子だけはじっと下を向いて食べようとしない。だから「君、遠慮しなくていいよ。ある時はある時なりに、ない時にはない時なりに、苦しみも悲しみも分かち合って、生きていくところじゃないか。」そう言っても彼は、箸をつけようとしない。そっと顔をのぞいて見たら、涙をいっぱい流している。山本さんは彼の涙を見た時に、自分はいかに鈍感な人間であったかを知った。それはあきらかに失望の、悲しみの涙であったのでしょう。山本先生ならぼくらの苦しみ、悲しみ、つらさがわかってくれるだろうと思っていたのに、やっぱり山本先生もみんなと一緒か、見ると聞くとでは雲泥の差やなという、失望の、悲しみの涙を彼は出していたんだと、つくづく思わざるを得なかった。なかなか相手の気持ちがわからん自分だなということを、その時実感せしめられ、教えられた。

そのことを後でいろいろかみしめてみますと、自分の娘の唾液が飛んで入ったのなら、それほど汚ないという嫌悪感はないでしょう。やはり、愛を感ずる相手の唾液は汚なくないし、愛を感じない相手の唾液は汚ない。こういう区分けをしていく、自分の真理からはずれた生きざまがあるのです。そうしてみると、結局自分は相手を愛しているかのような気持ちでいるけれ

ども、真底愛しているわけではないのではないか、と。

一つの出会いを通して、私たちはよく相手に「あなたのためを思っているんだぞ」といういい方をします。それはやはりちょっと、まゆつばものではないか、と。だから本当に人を愛するということは、自分には不可能ではないかという思いをしみじみ持ったとおっしゃるのです。

本当の愛がなくて申しわけないというところで、やっと人間同士の不完全ながらの信頼が保たれていくのではないか。実は身障者の方にお出会いして、そのようなことを学ばせていただくことができるのです。

世間からは問題児だとか、障害児とか、いろいろいわれている子がいますけれども、とんでもないことでして、そういう子ども、そういう人たちに対しても、光が見える眼を育てていかなければならないのではないでしょうか。

そういう心意気から出てくる眼を持っているすばらしい人が沢山おられます。最近そういうすばらしい子どもさんがおられるということを発見いたしました。それは、小学校一年生の子です。それを感じさせてくれるのは次のような彼女の詩です。

おじいちゃまは病気だから
おもらしをするので
おばあちゃまのパンツを
はいています
おじいちゃまのパンツがずれて
スカートみたいになりました
みんな　大笑いになりました
お母さんが毛糸のパンツを上にあげたら
また　はずれてきました
今度はおじいちゃまが
泣きそうな顔になりました

ただこれだけの詩なのですが、ここにはすばらしい、人に対する思いやりが脈打っていると思います。この子のおじいさんは、脳血栓で倒れられて、身体も言語も不自由になって、排泄

も自分の意のままにならない。そういう家庭の中にいる子なのです。ある時、おじいさんの毛糸のパンツがずれて、スカートのようになった。おじいさんは、自分の手であげることもできない。そのおじいさんの格好がまことに滑稽だから、家族の者が皆ウワーと笑ったというのです。それをじっとこの子は観察していたのです。お母さんがパンツをあげると、またずれてくる。その時おじいさんは泣きそうになった。おじいさんは、自分のそのみじめな姿が非常に情なかったのでしょうね。その子はおじいさんに心を寄せて、結局家族は皆笑ったけれども、自分は笑えなかったのです。これは笑った家族の感性よりも、この子の笑えなかった感性のほうが輝いています。

なぜかというと、この子はおじいさんの泣きそうになった表情から、すでにおじいさんのやるせないさみしさ、悲しさ、苦脳多きおじいさんの内面活動を感じ取っていたからです。笑った人は、そういう相手の内面活動を感じ取っていない。そういうおぞましさがあります。人の内面の動きをキャッチする感性を、我々はかなり喪失してしまっておりますが、喪失しないような生き方をしたいなということを、この子からも学ぶことができます。この子には、おじいさんへの思いやりをきちっと感じる感性が育っております。自分の周りには非常に楽しいお父

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

さんやお母さんがいるけれども、やはり同時に、自分の周りには悲しみ、悩み、苦しみを背負ったおじいちゃんもいるという、そういう一つの人間生活集団の実態、有様に、じっと目を向けて育っている子なのです。その子は学校へ行って、クラスの中にちょっと身体の弱い子とかがいると、弱い生き方をしている友だちのほうへ目を向け、困っている友だちがいるとすぐ手をさしのべ、障害の子がいれば、なんとかしてあげようと、そういう思いと行為を自主的に展開していくことを始めているそうです。

自分さえよければいいという人間になってはいけないということは、頭ではよくわかるのですが、そういう人間にならないために、やはりさまざまな人間とふれ合って、さまざまな人間をきちっと見つめていくということが、非常に大事なことであると思います。人間をよく見つめるということが、ある意味では、自分自身がまた心豊かな人間にならしめられていく大きな栄養の素になるのではないかというようなことも思います。

最近、自分の心意気の中に、ぴったりと親しまれてくる一つの詩を紹介して、私の話を終わりたいと思います。これは、坂村真民とおっしゃる方の詩です。皆さんの中でも愛唱しておられる方があるかもしれません。今、味わってきたような心意気をもって詠われているのではな

いかと思います。

二度とない人生だから
一輪の花にも
無限の愛をそそいでいこう
一羽の鳥の声にも
無心の耳をかたむけていこう

二度とない人生だから
一匹のこおろぎでも
ふみ殺さないように
心していこう
どんなに喜ぶことだろう

二度とない人生だから
まず　一番身近なものたちに
できるだけのことをしよう
まずしいけれど
心ゆたかに接していこう

二度とない人生だから
露草の露にも
めぐり会いの不思議を思い
足をとどめて見つめていこう

というものです。ちょうど時間になりました。粗雑な話に対して、ご静聴有難うございました。

——一九八八・一〇・二六——